

現代の ことば

かわせ
川瀬

いっし
慈

エチオピア北部の都市ゴン
ダールのストリートは、働く
子供であふれている。菓子や
タバコの詰まった籠を、首か
ら下げた少年たちがゴンドラ
まじと駆け回る。眩暈を忍
べた小さな乗前は、酒場を忍
ぶ容る覗き込み、チップをく
れそうに大人がいまいかが
がっている。靴磨きなどは
いたるところでなほり争い
に忙しい。ストリートは子供
たちにとって経済活動の母胎

であると同時に、生き抜くた
めに、ただただ自己を表現
する劇場でもある。
その少女の名はチャイナと
いった。エチオピア北部では、
肌の色が薄く一重まぶたの少
女は、アジア人を惹きつける
という理由から、この愛称で
呼ばれることが多い。
私が夜のゴンダールをあて
もなら歩いてみると、ゆでた
まごがぎゅぎゅりつまった水色
のバケツを肩に乗せたチャイ

ゆでたまご売りの 少女チャイナ

ナが現れ「カワセ、たまご買
つてよ」と走り寄る。その
のである。「いっし」と断る
とあなたにじゃなうと私に
買つてよ」と返してくる。結
局二つ買ひ、分け合って食べ
ることになる。彼女は片手で
ささぎと器用に殻をむくと、
新聞紙の紙片をいねいに開
いてその中の塩をくれる。

彼女の髪は安物の石鹸
の匂いがたまたま。類には農
村出身の女性特有の、キリス
ナが現れ「カワセ、たまご買
つてよ」と走り寄る。その
のである。「いっし」と断る
とあなたにじゃなうと私に
買つてよ」と返してくる。結
局二つ買ひ、分け合って食べ
ることになる。彼女は片手で
ささぎと器用に殻をむくと、
新聞紙の紙片をいねいに開
いてその中の塩をくれる。

昨年、ゴンダールを歩いて
いると私を呼ぶ懐かしい声が
聞こえた。

エチオピアのアムハラ語の
古いことわざに「たまごから
やがてヒヨコとなり、歩きだ
す」がある。これは長い時
間をかけて目標に向かうこと
や、努力を積んでなんらか
の技術を習得していくこと
を意味する。このことわざを
引き合いに出して彼女のこ
とを褒めると、チャイナはナ
ラアアと笑って言った。「私
はまだまだ、たまごなのよ」
と。

チャイナのあどけなく、屈
話のない笑顔と、夜の冷気を
吸い込んだ、ゆでたまごの殻
のひんやりとした感触が、私
のなかに残っている。

(国立民族学博物館助教、映
像人類学・アフリカ研究) 映
+



ト教正教会への帰属を示す十
字架のタトゥーが刻まれてい
た。はははしい化粧は、10
代半ばの彼女には不釣り合い
である。街の人間たちが田舎
者の印として馬鹿にする、類
の十字架を隠すためなのかも
しれない。

チャイナはよく「あなたの
国に連れてってよ」と私に言
った。私が何も答へられず
いると、水色のバケツを抱え
て、ケラケラと高らかに笑い
ながら走り去っていく。彼女
が、たまご売りの仕事と同時
に、体を売る商売をしていた
ことを知ったのは、ずっと後
のことであった。

帰属のよくなったチャイナ
は、民族衣装を纏い、わたし
のために「コーヒーセレモニ
ー」を行ってくれた。これは、女
性が行う、もてなしの精神が
凝縮した日常の大切な儀式で
ある。コーヒーを飲む私に対
して、チャイナはどのとめも
ない話をした。2年ほど中東
に出稼ぎに行ったこと。カフ
エの開店には、欧州のパトロ
ンの男たちが出資してくれた
ことなど。